

序 羽曳野市における市民活動の推進と市民と行政の協働に向けて

「半世紀以上、この地で生活しておりますが、日本の良さ、生活習慣がなくなりつつある今日このごろ、教育など諸々の課題をいっそう向上、発展させ、羽曳野市を活発化し、よりよい市になるように役立ちたいから応募します。」

「定年退職を機に、私はいままで会社人間から、第二の人生を今度は、地域社会人間として、長年住み親しんだこの羽曳野で自己実現を図るため、生活のシフトを180度転換させました。」

「はびきの市民大学で市民のためのNPO講座を受講いたしました。これからの市民社会でNPOがいかに重要であるかということがよくわかりました。参加民主主義という言葉がありますが、新しいまちづくりにはNPOが協働しあっていくことが大切だと感じ少しでもお役に立てればと思い応募しました。」

「これまでの恩返し・お礼にといえば大変おこがましいのですが、会社勤めでの経験や市在住歴を活かして、羽曳野市のこれからのまちづくりにお役に立てればと思い応募した次第です。」

「私は常々人びとの生活により潤いがあり、心身がより豊かさを得るにはどうしたらよいのかに対して深い関心をもって過ごしてきました。現在の羽曳野市においても『雅び』という文字が目につきますが、本当に市民の生活が雅びの状態にあるのか、また、個人個人が雅びの心を持つべき自覚をしているかどうか疑問が残ります。」

「(市民活動の経験を通じて)『行政との協働』の必要性を痛感し、ぜひ応募したいと考えた次第です。」

「市民本位のまちづくりをすすめるために、自分は何ができるのか検討し、次の世代に受け継がれる事業をボランティアで実践したい。」

これらは、すべて私たちが羽曳野市における市民活動の推進のあり方と市民(活動)と行政の協働をすすめるための環境づくりに対する提言をおこなう会議(=羽曳野市民活動推進検討会議)への応募の際に添えられた委員の動機の一部です。これらの言葉には、「自分たちが暮らす羽曳野をもっとよくしたい」、「私たちが暮らしてきたこのまちに恩返しをしたい」、「これからの社会をつくる子どもたちにとってよりよい地域を

つくりたい」という思いが込められています。そして、「そのためには、市民と行政の協働のあり方を自分たち市民の手で考えていかなければならない」という決意が表れています。

これらの思いはこの会議を通じて、より強いものとなっていきました。それは、委員それぞれが、各自の立場から見ていた現状や問題点、そして思いを持ち寄り、話し合う中で、より視点が広がっていき、各々が新しい発見をしたことに由来しています。そのような意味で、この会議は市民と市民との協働の場であったといえます。

このような会議の中で、私たちは、まず「羽曳野市をどのようなまちにしたいのか」について考えました。なぜならば、「市民と行政の協働」というテーマはとても広く、漠然としているので、きっかけが必要だったからです。

市民と行政の協働の目的は、「まちや地域を一緒につくる」ことに他なりません。したがって、私たちがどのような羽曳野市をめざしているかが問われなければならないのです。そして、私たちが出した答えは、次のようなものです。

私たちが考える「羽曳野市のめざされる姿」

羽曳野市に暮らす人びとが、快適に暮らすことができ、市民活動に参加する市民がやりがいや達成感を得ることができるまちを、自立的な活動をおこなう市民や市民活動団体と行政とが協働してつくる。

これには2つのポイントが含まれています。ひとつは、羽曳野市というまち(地域)で暮らすことの意味です。他市町村ではなく、羽曳野市になぜ住むのかということをお言葉にしてみました。羽曳野市に暮らす理由には、もちろん、安全や安心を保障してくれるということは大前提であるのですが、それ以上になにがあるのか、ということです。

そこで、私たちは羽曳野市に暮らすことで享受することができる「快適さ」が重要であると考えました。この快適さには、市内のインフラの整備などのハード的な要素も含まれます。しかし、それ以上に私たちが大切だと思ったのは、「日々の暮らしが楽しい」と思えるような充実感を得たり、「自分は何かをした」という自己実現を達成できる機会というソフト的な要素です。

そして、重要だと考えたことは、この快適さは行政から市民に与えられるものではなく、市民と行政が協働して創りあげるものであるということです。

もうひとつのポイントは、市民活動をする意味です。つまり、市民活動とはどうしてもしなければならない活動でもなく、しかも義務でもないにもかかわらず、なぜするのかということをもう一度考えなければならぬと思ったのです。

市民活動は多くの場合、困難にぶつかります。例えば、資金や時間が限られているために自分が思ったような活動ができず、あきらめてしまうこともあります。また、活動に

対して他の人びとが理解を示してくれない場合もあるでしょう。しかし、そのような困難を乗り越える努力や労力を払ってでもこの活動を続ける意味がどこかにあるのではないのでしょうか。ひとつには、活動によって何かが解決される、あるいは変わるという直接的で実効的な意味があります。おそらく、市民活動への最初のきっかけはこのような目的であるものが多いと思われます。

とはいうものの、直接的な効果だけを求めるのならば、行政や企業に任せればよいことといえます。このように考えると、市民活動をする意味にはもうひとつ重要な意味があるのではないのでしょうか。それは、これらの活動を通じて、やりがいを感じ、場合によっては活動を通じて自己実現を果たすという点です。何か人に役立つことをして「ありがとう」といわれる。そんな瞬間に「ああやっていたよかった」という充実感や達成感、お金では買うことができないものでしょう。これは、行政や企業に任せていては得られないかけがえのないものです。

つまり、市民活動とは直接的には、市民が感じたり直面している問題を解決する、あるいは満たされないニーズを満たすために行う他人のための、つまり利他的な活動といえます。しかしさらに見方を変えるならば、間接的ではありますが、その活動を通じて、活動を行っている人が生き甲斐や自己実現を図るという自分のための、すなわち利己的な側面も持ち合わせているのです。言いかえると、市民活動とは「自分を含めたみんなのためにする活動」ということなのです。場合によっては「他の人のための活動」となり、自己犠牲や禁欲を必要とすることもあるのですが、市民活動とは本来はそうではないはずなのです。市民活動は、自分のため、そしてそれがひいては他の人びと、そして社会のために広がっていく活動であるはずなのです。

そのような観点から、私たちは市民活動をとらえ、この活動を推進していく方策について議論を重ねました。議論の中で出てきたことは、羽曳野市では、その兆しや可能性はあるものの、まだ市民活動が活躍するには十分な環境が整っているとはいえないということでした。そして、この市民活動が活躍できる環境は市民が単独で創りだすものでもなく、行政が一方向的に与えるものでもなく、環境づくりから、市民と行政が協働で行うべきであるというコンセンサスが創りあげられました。

したがって、十分ではない市民活動を推進するための環境をさらに改善し、新しい環境を創り出すためには、現状のままではなく、市民と行政、両者に変化が必要となるのです。この変化を通じて、市民と行政の協働による市民活動の推進が行われ、私たちがめざす羽曳野市のまちづくりが達成されると考えます。

そのためにはまず、市民は何をすればよいのでしょうか。従来、自分たちの生活に関わることはすべて行政がすべきことであるという考え方を問い直す必要があります。つまり、「自分でできることはできる限り自分でやる」ということです。これは、非常にわかりやすいことではあるのですが、実行に移すことはとても難しいことです。

私たちがめざす羽曳野市というまちは、誰かから何かを与えられることを期待したり、要求することによってつくられるまちではありません。私たちが羽曳野市に暮らすことで

得ることができる快適さを創り出すのは、自分自身の参加を前提としたものなのです。なぜ、そのような場に参加しなければならないのでしょうか。それは、この快適さとは、やりがいや達成感・充実感に裏づけられたものであるからなのです。

一方、行政は何をすればよいのでしょうか。今まで、行政は私たちが望んだものうち必要とされる様々な環境を整備・管理してきました。その働きは、これからも期待されるものです。しかし、時代の変化、市民の変化などに応じて、行政も変化を迫られているのではないのでしょうか。

行政は、そのまちの人びとの「最低限」の暮らしを「公平に」そして「均等に」保障してきました。この原理は、羽曳野市のどこにいても、ある程度の生活環境を獲得できるという意味では、評価されるべきものです。しかしながら、この原理は場合によっては、「個性」や「独自性」を認めない傾向があります。

個人の価値観は多様化しています。このような状況で、行政も個性や独自性を評価する必要があります。多様な市民活動は多様化した価値観を表しています。これら多様な市民活動は、市民が「自立」しようとする意志の現れでもあります。したがって、行政はこの市民の自立を公平性や均質性の観点から否定するのではなく、この意志を支えていくべきなのです。

このように、市民と行政にはそれぞれの課題があります。この課題を乗り越えていった先には、私たちが描く羽曳野市のめざされる姿が見えてくるはずだと考えています。

ここで述べたことは、羽曳野市民活動推進検討会議に集まった委員全員で考えたことです。私たちがおこなう提言に至るにはいくつかの段階を経てきました。私たちは、「羽曳野市のめざされる姿」を考えるために、なぜ市民活動の推進や市民と行政の協働を考えなければならないのかということ、そして興味関心を持っているテーマ(福祉・教育・環境・NPO)について平行して考えていきました。そして、これらの議論をもとに、具体的な市民活動推進のための方策についてまとめていきました。